全篇三欵に分たれて居ります。而て全篇を通じて七五調で成つた歌であります。

第一欵には學問の大切なこと、友に交る心得、娯樂の心得等を述べてあります。其の學問の大切な事を敎へるには余程面白い事を言つて居ります。

第二欵は歐州の今日の實踐倫理を說いて居ります。第一身体に對する心得例へば居住についての注意に換氣法或は身体を穢すことの惡しき道理禁酒のこと等を七五調に書いてあります。

第三款上には之れも歐米の實踐倫理で他のものに對する務を說いて居ます。第一に禽獸虫魚に對する務を載せてあります。之れは直接に動物に對する心得とはせずして人の心の鍛錬上修養上今日でも小學校の心得中に入れてあります。第二には世の人に對する務で第一期の思想が現はれて居ります。第三に僕婢に對する心得之れは實際從來家族本位の我國に最も發達して居るべき筈で又實際は行はれて居つたが敎としてはなかつたのであります。此書にはこの事が余程親切に書いてあつて僕婢も亦一人格てあるといふ歐風の道德が明に現はれてゐます。

即ち僕婢も同じ人間であるから其自由意志を束搏してはならないと云ふ事が書かれてあります。之れが西洋の人權問題であります。其次に叮嚀に僕婢を使ふことが書いてあります。

一斯くの如く人權と云ふことを主張してゐますから師や老人を尊敬する思想はないかと云ふにそうではありまん。之れは日本にも西洋にもある思想であります。殊に注意すべきことはこの樣に西洋

の理性主義に由つて作つたものでありますから夫婦間の關係は男女同權を主張して居るかと云ふにそうでもありません夫婦は互に名譽と幸福とを分つべきものであると云つて居ります。女子は如何なることをすべきかと云ふによく夫に仕へると云ふにあるのであります。兎に角未だ女權の擴張迄には達して居ないのであります。

思ふに明治九年の土居光華氏の文明論女大學には極端に男女同權を主張して居る。然るに第二期には元にかへりて支那風となり勅語の發布に由つて愈問題が定まりました。而して明治初年に於ける女子訓の一端は女學の梯に由つて窺はれるのであります。(以上)

◉道德的智識と道德行爲との關係

文科四年　福田ふめ

道德的智識と道德的行爲との關係の中で、道德的智識が全〳〵道德的行爲となつて現はれうるものであるかと云ふ事に就いて、一寸常識的に考察して見樣と思ひます。先づ、其に就いて古人の說を窺ひ、而る後に其の古人の說を基礎として自分の考へを發表致したいと思ひます。其の古人の說は、ソクラテスの智德合一論を擧げ樣と思ひます。何故にこの人の說を出すかと申しますと古來、知行の關係に就いて論じた學者は多くございますけれども、皆其學說のほんの一部分をなして居るに過ぎませんでした。之に反して此人の知行に關する研究は、其の學說の大部分をなして居る爲であります。

さて、ソクラテスの說を申し上げると致しましても、ソクラテスには一つも著書がなく、又、ソクラテスは系統的に學說を立てた人でもなく、只時につれ事に當つて斷片的に其の意見を發表して以て、ギリシャ哲學上に一の覺醒を與へたに過ぎないのでありますから、明かに其の學說を窺ふ事は出來ません。併しソクラテスの學說は其の弟子なるプラトーンの著對話篇に悉く輯めてあるさうで御座いますから、之に賴つてソックラテスの學說の大体は知る事は出來ますけれども、何の邊まではソクラテスの云つた事であつて、何の邊からはプラトーンの附け加へたところであるかは分り兼ねますから、此處ではソクラテスに就いて書いてある種々の小冊子にある事柄を總合して、以て、ソクラテスの本意のあるところを窺ひ、其れによつて此の問題に對するソクラテスの解決を窺つて見ましたら、「我等は知つたならば必ず行ひ得べき筈である。而るに、時には自分が知つて居りながら、行ひ得ない樣に感ずる事があるが、其れは自分が知つて居つたと思ふのは間違ひであつて、其の實は眞に知つたのではない」と云つて居ます。更に言葉を換へて申しますと、「知と德とは同一なるものであつて、眞に知つたならば必ず行ひ得べき筈である。行ひの伴はぬ知は是れ眞の知ではない。故に吾人の善と知つて尙行ふ事の出來ないのは、其の善に關する智識が不明瞭なるによるものである」と言つて居ります。而して、何故に眞に善と知れる事は必ず行ふ事は出來るものであるかと申しますと、「善とは凡て人間にとりて幸福なる事を指す。幸福とは人々の自然の慾望を滿足せしむるものをいふ。而して、人々の動作は皆慾望に基いて生ずるものであつて、若しこの世の中から慾望を取り去つたならば、一切の人間の活動は止まつて終ふ。故に善と知つたならば何人も之を行ふべき筈である」と。尙其の說を委細に申しますと、「世の中には善と名のつく行は甚だ多く、其の趣は千差万別であるけれども、皆凡て吾人に對して幸福を齎すものである。或は、中には善行を爲した場合と、其の善行の種類とによつて、外見上は不幸を齎した樣に見える事もあるけれども、其の時でさへ、良心の滿足、又は、高尙な生活といふ意味に於て、勝れた幸福を齎して居るのである。例へば、自己の確信のために最後まで鬪つて遂に敎への爲めに殉した人々は、其の表面に於ては如何にも悲慘で聞くに堪へぬ不幸の狀態に居る樣ではあるけれども、其の人の良心に感ずる幸福、並に、左樣な神聖な生活を送り得た幸福は實に無限なものである。之に反して主義も主張もなく善い加減に世の中を胡麻化して行く人は、其の表面に於ては如何にも氣樂で幸福の樣に見えては居るけれども、その心の中の不安、並に、下劣な生活を送つたといふ不幸は、實に大なるものである。斯くの如く、善といふ善は凡て世の中に幸福を齎し、惡といふ惡は凡て世の中に不幸を齎すのである。而して幸福とは人々の眞に慾望を滿足させるものを指す故に、人は誰でも幸福を望まぬ者はない。そして、人々の活動は慾望に基いて居る。而して其の慾望を滿足させるものは善であるから、善と知つたならば必ず行ひうべき筈である」と言ふ事であります。以上の如く、ソクラテスは我等の不

德を致すのは無知なる故であると申して居ります。これは果して正當なる考でございませうか。理窟を以て此の說を吟味致します前に、我等の身邊の實際に就いて穩やかに考へて見たいと思ひます。

我等が惡い事をすると言ふのは其の惡なる事を知らぬからのみでありませうか、又、其れと反對に、善い行を爲ないのは善たる所以を知らぬ計りでありませうか。又、倫理學者は凡て道德家でございませうか。實際に照して一寸考へて見ますれば、吾等の惡い事をしたり、善い事を爲なかつたりするのは、あながちに吾等の無知なる所以計りではないと思ひます。單に吾等はかく感ずるばかりでなく、古今東西の聖人と云はるゝ人々も、この事に就いては證明して居られます。即ち、論語中に孔子の言として、「聞義不能徒不善不能改是吾憂也」と云ふ語が載せてあります。又新約の羅馬書の中に基督敎の學者として有名なポーロの言として、「我が願ふところの善は之を行はず、反つて願はざるところの惡は之を行へり」といふ事があります。故に實際の實例より致しまして、知つて居つても行はぬ事は隨分ありうる事で、全々知行が同一だとは言はれぬと思ひます。

さらば、ソクラテスの說が何處に隙があつて先の樣な結論に達したかと申しますと、「善は誰でも望むものであるから、「善と知つては何人も必ず實行するものである」と、云つて居る事は少し獨斷に過ぎた事と思ひます。何故なれば、人は必ずしも善意志を持つて居る者計りだとは云はれない、稀には善を好まぬ人があるかも知れません。善を好む人であつても、時によつては惡を好む樣な性質になつて居る事があるかも知れない、又、たとひ善を好んで善を爲さんと心掛けても何うしても實行の出來ぬ人もあり得べき事でおざいませう。故にソクラテスの說は、ソクラテスの樣に善良な性格と善良な意志とを持つた人にのみ適應せしむる事が出來うる事だらうと思ひます。サウ云ふと、或は、左樣に善い性格と强い意志とを持たぬのは、病的であつて理論の標準とする事は出來ぬと、云ふかも知れません。如何にも、それは病的でせう。併し、實際の世の中には病的でない完全な人間が幾人あるでせうか。實にソクラテスの樣な人は曉の星よりも尙少い事と思ひます。而して、倫理は、實際に基いた一般規範的の理論を述べるものとすれば、何うしてもこの多數の病的の人、不完全な人を基本として立論せねばならぬと思ひます。而るに、ソクラテスの說は、ソクラテスの道德的信仰、即ち、人は誰でも善を行はんと欲し、又行はんと欲する善は必ず爲し得る力を持つて居るものであるといふ信仰から出立した說で、人生の實際に基いたものではありません。故にソクラテス一人の主觀としては眞でありませうけれども、一般の人に適應する事は出來ぬと思ひます。即ちソクラテスは其の說の根本を性善と獨定したのが不合理なところであります。

以上述べ來つたところによつて、知德合一論は、實際上に於ても亦理論上に於ても必ずしも眞なりとは言はれぬは、確かな事であります。

私の考へます所では、知と、德とは元來全く異なるものでありまして、知つたからとて必ずしも

行ふ事は出來ぬものであると思ひます。併し、知と德とは全く關係のないものではなく、其の間に意志といふ媒介物が入ると互に關係する事の出來るものであります。何故に意志の媒介がなくては知と德と一致する事が出來ないか。この事を考へます前に、道德的智識とは何か、道德的行爲とは何かと云ふ事に就いて、其の意味を定めて、其の意味を有せる範圍内にて互に比較して、道德的智識と道德的行爲とは必ずしも一致せざる理由を明かにしたいと思ひます。

先づ、道德的智識とは、善或は惡とは如何なるものであるか、惡は爲まじきものであつて善はなすべきものであるといふ概念と、進んでは、道德的判斷力、即ち、實際に臨んで道德的原理を應用し、以て、其の行爲を評價し得る力とを言ふのであります。故に知とは心にのみ屬するもので、外見には現はれません。ために知者も愚者も外見のみでは同じ樣で、少しも區別のあるべき筈はおざいません。かの老莊の方で、大知は愚なるが如しと云つて居る意味は、要するに、無爲にして化すといふ大眞理を体得して居るものは、自ら進んで事をせずに、只惘然として居るから一見愚人の樣であると云ふ譯ではありますけれども、他の一面から一寸淺く考へて見ますと、智識が非常に勝れて居て全身是れ知慧といふ樣になり、心の他の活きが全く影を潛めて終つた故に、其の外見はやつぱり愚人と同じ樣に見えるとも、解釋致されると思ひます。併し、普通には智者と愚者とは外から見ても自然に分る、と云ふ譯は、知の性質として、意志の媒介によつて行と關係し以て外形に現はれるものであるからであつて、必ずしも知行が同一なる故ではないと思ひます。故に吾等は容易に人の賢愚を判斷することが出來ぬものであつて、如何に賢人であつても、其の人が發表の方法の拙い時は、愚人の樣に見えるものであるから、能く注意して愚人らしく見える人の前でも、決して恥しい行ひは爲すべきではないと思ひます。即ち、其の人が案外な賢人であつて、一も二も凡てこちらの心中を見徹して居るかも知れません。この問題を教育上から考へて見ましたならば、隨分面白い問題だらうと思ひます。即ち、馬鹿らしい子供は案外知者であつて、知者らしい子供が只發表の方法が甘いに過ぎなかつたといふ事實が發見せられ、其れと同時に其の馬鹿らしい而かも知者なる子供に發表の方法を熟練せしめたならば、一方に於ては益々其の子供をして發展せしめ、一方に於ては只一人の胸に輝き埋れ果つべきであつた智識を國家社會の爲めに提供する事が出來ると思ひます。其の如何なる子供がこの種の子供であるか、又、如何にして之等の子供を教育すべきかは教育上研究すべき問題だらうと思ひます。

次に、道德的行爲とは如何なるものであるかと申しますと、凡て如何なる行爲であつても道德的方面から觀察すれば、道德的行爲となるのであつて、必ずしも特別なる道德的行爲があるのではおざいません。例へば、此處に人があつて、木綿の着物をきて居るとします。この行も亦道德的行爲とする事が出來る。即ち其の人が木綿の着物を着て居た爲めに、周圍の人に儉約の心を起させたな

ちば、或は、その木綿の着物が其の人の身分相應のものであつたならば、其れ等の道德的方面から觀察して、立派に道德的行爲とする事が出來ます。かくの如く、凡ての行爲が道德的行爲として見る事が出來るのみならず、同じく道德的方面から見ると致しましても、種々なる方面から觀察して種々に評價する事が出來るものであります。故に人の行を輕々に論斷し去る事は出來ぬものであつて、必ずや種々の方面から觀察し、總合して　善は善とし、惡は惡として認めねばならぬと思ひます。故に凡ての行に對して單純なる評價は下し得ぬもので、多くは若干の善事と若干の惡事とが集つて出來て居るものでありまして、徹頭徹尾排斥すべき行もなければ、徹頭徹尾歎美渴仰すべき行もなく、只比較的に善の分子の多い行を善とし、惡の分子の多い行を惡とするのみであります。かう云ふと甚だ道德的良心が鈍く、道德的情操のない者の樣に聞えますけれども、其れは事實であるから仕方がないと思ひます。只人は其の一點たりとも善の分子の多い行に對しては、全身の熱血を濺いでなすべきであると思ひます。而る時は往々にして片寄つた道德家に見る樣に、自分の行爲に對して過重の價値をおき、ために妄想狂の誹りを受くる樣な事なく、而かも、十分に道德を行つて遺憾なくする事が出來ると思ひます。さらば、行爲とは何かと申しますと、普通には自覺して實行せんと傾いた凡てを指して云つて居ります。即ち、自分である善行をし樣と思つて、種々に其の方法を計劃して實行に現はしたものも、計劃した計りで遂に實行に現はす事が出來なかつたものも、計劃して實行した事が何遍も何遍も繰り返へされて、遂に、習慣となり、無意識に、計劃なしに行ひ得る樣になつたのも、凡て行爲と云つて居ります。併し、こゝでは我等は知つて居る事は何でも行ひ得るものであるか如何といふ問題の下に考へて居るのであるから、實行に現はれる方面の行爲計りを採て道德的行爲と致します。即ち、道德的行爲とは、精神の作用を代表したる肉体の運動なりと定義致して置きます。已にして道德的行爲との定義と校べて見ますと、知は心に屬するもの、行は身体によらねば現はれぬものであります。故にたとひ知て居ても、其れを肉体に表はさうと力めなければ行となる事が出來ません。又行はうと思つても、肉体に其の練習が出來て居なければ、亦實行する事が出來ません。故に完全な道德的智識と、完全なる道德的能力とを持つて居ても、其の間に意志の力が働がなければ、其の智識が行となる事は出來ません、況んや、不完全な道德的智識と能力とを持つて居る普通の人にあつてはでございます。實に知行は必ずしも一致すべきものではありません。

已にして、知行が必ずしも一致すべきものではないといふ事が分つて終へば、この問題の解決は終つたのでありますが、更に一歩を進めて知行を一致せしむる方法を探究して、この問題の要求する解決以上に、望みと力とを得て、この問題の終結をつけたいと思ひます。

先づ、如何にして知行を一致せしむべきかを校べる前に、何者が知行の關係を妨ぐるかといふこと

を校べて見ませう。勿論、完全な道德的智力と能力と意志とを持つて居れば、何者も知行の關係を妨ぐるものはありませんけれども、そんな完全な人は、この世の中には、とても望み得られませんから、先にも申しました通り普通の人を標準として申し述べます。思ふに、其の原因は身体と精神とに見る事が出來る。そして身体に於ては体力と習慣とに分ち、精神に於ては知情意の三方面から見つける事は出來ます。

第一、身体が薄弱で精が續かなかつたならば、十分に自分の思ふ事が出來ません。第二、惡い習慣がついて居るならば、余程の努力をなし、余程の精力を用ひても、容易に善行の出來ぬものであります。第三、智識に於て、自分の道德的智識を實行すべき適當なる手段方法を誤つたり、又、思慮が足りないために、自分の行ふべき事柄に對して起り來べき遇發事項を豫想せず、爲めに途中に於て狼狽したり又、一寸した理論上の間違ひから飛んだ結論に及んで、常には能く解つて居る事であるのに係らず、つひ其の時は惡と思はず、やつて退ける事があります。こんな誘惑は、世間の事情を深く知らず、只一意眞面目に理論によつて行かうとして居る若い人達に多くある事と思ひます。かのゲーテのファストの中に「何時でも惡魔の議論や說法は表面上道理ある樣に聞えるものである」と、云つて居る事がここに當ると思ひます。第四、は感情に於て重苦しい、不愉快な、卑怯な、感情が人の心並に身体を束縛して十分に思ふ樣に活動させぬ事があります。第五、意志に於て、或は中途で挫折したり、或は勇氣が足りなかつたりして、十分に思ふ樣に出來ぬ事があります。

以上の如くにして、知を行に現はさんとする時妨げをするものが分つたならば、この妨げを取る工夫をするのが知行を一致させる一つの方法かと思ひます。故に其の方法の

第一としては、身体を健康にする事であります。身体が健康であれば、心身の連合が自然に密接に自由になつて、身体は能く心の云ふ事を聞く樣になります。第二に、起擧動作を常に端正にして惡い癖をつけぬ事であります。第三には、智識の修養に力むる事で、就中道德的原理を、適當に敏捷に日常の事に應用する練習を忘れぬ事、及び、凡て事物を正當に考へる工夫をする事、即ち、自己の主觀に捕はれないで公平に事實を判斷し得る樣にするのでございます。第四は、感情の滋養であります。快活な、愉快な、勇壯な、活動に溢れた元氣ある感情を養はねばならぬと思ひます。其れを養ふには種々の方法はありませうけれども、何時も左樣な氣分を維持して居る事と、出來るだけ左樣な感情を起すものに接し、差し支へない限りは、世界の暗黑面を見ない樣にして、常に光明の方面ばかりを見て居たならば、何時の間にか左樣な氣分になつて來る事と思ひます。第五は、意志の練習並に鍛錬であります。何でも爲すべき事は進んで實行して見ると同時に、同じ善行を何遍も何遍も繰り返して身体に善習慣をつける樣に致して、意志を善良にし、且、强く致す事であります。さうすると知行の關係が極めて自然的となり、從つて知れば從つて行ひ得る樣になると思ひ

ます。併し以上の事々は皆消極的な方法でありますが、更に進んで、積極的に其の關係を促す方法は何かと云ふと、第六は意を誠にすること、第七は虛心平氣で居ることであります。

第六、意を誠にすると云ふ事は、善は行ひ、惡は決して行はぬと眞面目に力むる事であります。之は誰にでも分り易い事でありますけれども、眞に意を誠に爲樣といふ事は、隨分難い事で、殊に智識の多い大人にあつて困難なことであります。意が誠でなければ、如何に智識を有して居りましても、只智識の貯藏物となる計りで、人格の進步發展に其の智識を應用する事が出來ません。即ち、知をして行たらしめ樣とは力めぬのであります。之に反して、意が誠なる時は常に知と行とを關係せしめ樣と自律的に力めますから、積極的に知と行の關係を促す事が出來ます。更に進んで、第七の方法としては、虛心平氣、即ち、凡ての執着心を取つて出來得るだけ爲すべき事をする事で、之が最後の方法かと思ひます。換言すれば、方法も何もなく、只出來るだけ爲すべき事をするのです。併しこの方法を採るには、ある程度まで道德の進んで居る人でなければなりませぬ。それがために一寸道德的進步の上から、人々の階級を分けて見ますと、大体四階級に分れると思ひます。第一は惡い事を爲樣と思つて居る人、即ち、根性の曲て居る人、第二は、惡い事をしようとも善い事をしようとも何とも思つて居ない人、即ち、無神經な人で、第三は、善をなし惡を避けんと思つて居る人、即ち、感心な人の部類でありまして、意を誠にする事に力めて居る人であります。併し、永くこの階級に屬して居るといふ事は、非常に勢力の上に不經濟な事であつて、此の境界に居ると、常に善をし惡を避け樣といふ心、即ち、道德心に捕へられ、小心翼々として心に隙がなく、或は、後悔或は、杞憂に、無駄に精力を費し、實行に臨んでも專心になる事が出來ず、熱心に道德の事を思つて居る割合に、さう大した實行をする事が出來ません、この境界のある點まで進んで參りますと、其の人の性格が全く純粹なものになりまして、どんな機會に遇つても、決して惡心の兆さぬ樣になります。その時は、更に、第四の境界に踏み込まねばならぬと思ひます。其れは、虛心平氣で凡ての執着心を去つて、臨機應變に其の善心を遺憾なく自由自在に發露しうる人となるのであります。所謂悟つた人となるのであります。さうすれば、心は常に安んじて海の如く、不必要ことに精力を費さず、實行に臨んでも捕へらるるものがないから、專心になつて思ふまゝに知つて居るだけを行ふ事は出來ます。そして虛心平氣で居れば、單に心の經濟である計でなく、身体も亦次第に健康になり、益々實行に自由になつて來るものであります。人は如何に考へても爲しうる以上に爲す事は出來ません。そして爲しうるだけなすには、爲すべき事に對して全力を竭すにあります。爲すべき全力をつくすには、虛心平氣で只爲すべき事を爲すより外の方法はありません。

故に虛心平氣で爲すべきだけを爲せといふ語は、今日の問題の最後の斷案かと思ひます。そして如何にしたならば虛心平氣になれるかと申しますと、或は坐禪をして見てもよいでせう、學問藝術

の奥底に達するもよいでせう。又、陽明學を極めて心膽を練るもよいでせう、哲學を研究して宇宙に於ける自己といふものを考へて見てもよいでせう。其の他、其れ其れ多くの方法はありませうけれども、要するに、個性や境遇を顧みて、最も自己に緣ある方法により、以て各自工夫するより、外はありません。併し、最も手近き方法は、現在只今から何の方法も用ひずに、只虛心平氣になる事でございます。こゝに於て注意すべき事は、虛心平氣とぼんやりとを間違はぬ事であります。虛心平氣とは字の通りに、心が空しくて靜かな事ではあるが、臨機應變外界の事情に應ずる事の出來る樣な心の狀態を指すのであります。即ち心の不動の姿勢をいふのであります。（完）

◉靜寬院宮親子內親王の御事蹟

文科四年　杉山はな

爛漫たる春の花にも嵐の妬あり玲瓏たる秋の月にもむら雲のうれひありとか申しまして人の世の中はとかくに思ふやうには行かぬものでございます。人皇百十九代仁孝天皇の第二皇女でいらせられました和宮親子內親王の如きも亦この天數にもれぬお一人でおざいました。竹の園生の尊き身におはしながら三十三年の短い生涯を不幸にのみおすぐし遊したのでございます。

國史悠久としてすでに二千五百有餘年其の間もとより忠孝義烈の士に乏しくありませんが婦人で範を後世にたれたのはいくらもありません、これは婦人が公に立ちて事をせず、多くは內部の活動者であるから、其事蹟は比較的世に傳はることが少ないのでおざいませう。しかし此の和宮樣は、子としては孝に、妹としては悌に妻としては貞に、しかも國家の危きをかよわい一身にさゝへられました、其の雄々しさ實に我々が女子の此の上ないよき鑑でおざいます。宮樣は仁孝天皇の第二皇女にて、御姉君を敏宮淑子內親王と稱し奉り、御兄君は即ち人皇百二十代の聖天子孝明天皇におはします。御父帝御崩御の際には、和宮は尙御生母橋本經子の方の胎中にましましゝが、其の後四ケ月をへて、弘化二年五月十日に御誕生あらせられました。即ち御生母は、橋本氏で藤原の經子と申上げました、大納言實久卿の御息所でございました、宮中では新典侍の局と申上げました、官女でおざいます。この故に宮樣は外祖父橋本大納言の御手で御成長遊されました。月日に關守はなく宮は何の御さはりもなく天晴に御成長遊しましたから、御兄弟の御いつくしみは勿論ことに御生母新典侍局はうき中の只一つの御樂しみと遊ばして、指折りつゝ其の行く末をお待ち遊したのでございます。

當時諸親王の中にて家格といひ、威望といひ一きは時めき榮えしは、有栖川の宮幟仁親王で御嫡子熾仁親王と申し上げた御方は、御器量といひ御年頃といひ、恰當の御緣に渡らせらるゝを以て、宮とは筒井筒振り分け髮の御年頃より許嫁の約束御勅許あり、行く行くは有栖川の御息所と仰がるべき尊き御身にまし〳〵たのに、尊貴榮華の御身にも世上のうきは免れ給はず、世の浪風に妨げら